

【論説】

二つの多元主義とジレンマ

—ウィリアム・コノリーとジョン・ロールズをめぐって

東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻博士課程

佐藤 竜人

1. はじめに

本稿が着目するウィリアム・コノリーは、アメリカの政治理論を長年にわたって牽引するうちの一人であり、幅広い議論を展開してきた。1960年代にポスト行動主義政治学批判で登場した¹。その後は、1980年頃からM. フーコーなどのポスト構造主義の政治思想への受容、F. ニーチェ左派的立場からの現代思想への批判など近代の政治主体をめぐる問題について精力的に論じている²。以降、G. ドゥルーズの『哲学とは何か』や『千のプラトール』に触発されて神経科学や複雑系科学などの自然科学へと接近しI. プリゴジンやI. ステンジャーについて論じたり、W. ジェイムズやA.N. ホワイトヘッドらの系譜に着目することでアメリカ思想における多元主義の脈を掘り起こしたりしている。

コノリーの政治理論を特徴づけているのは、多元主義である。アメリカ政治学史を見たとき、多元主義に関わる理論はR. ダールやC. リンドブルム、A. ベントリーなどの研究に一つの端緒を見出すことができるだろう³。彼らが作り上げた利益集団による多元主義は、1980年代にかけて人種問題の表面化、ベトナム戦争への反戦運動の高まりのなかで批判されていった⁴。そうした社会状況の中、本稿でもう一人着目する人物であるJ. ロールズが登場した。彼の議論

¹ 政治学批判をした初期のコノリーからニーチェ = フーコー主義として結実していく過程を論じたものとして乙部（2003）。

² とりわけコノリーのニーチェ的側面に焦点を当てたものとして森（2014）の第六章。

³ もちろんアメリカ政治学における多元主義は彼らよりも遡って、H. ラスキなどにも見られる。詳しくは早川（2001）を参照。

は規範理論という観点から政治哲学の復権を果たした。この後、ロールズの政治理論はM.サンデルやC.テイラーらなどとのリベラル・コミュニタリアン論争に巻き込まれていくことになる。こうしたよく知られているアメリカ政治学におけるメインストリームの論争に対する第三の道としてコノリーの政治理論は位置づけられている⁵。

しかし、コノリーの多元主義理論は、必ずしも価値や権利に関する多元性を論じるメインストリームとの関わりのみによって汲み尽くせるわけではない。コノリーの多元主義は、ジェームズが論じる多元的宇宙にも多くを負っている。ジェームズが論じた多元主義はホワイトヘッドによって継承され宇宙における生成の議論として展開されている⁶。そこでは、必ずしも価値や権利に関する多元性のみに限らず、人間以外の生物などの存在者についてや、新たな多元性がいかに生まれるかという生成について論じられるなど世界そのものについて問う存在論的な探求が行われている。アメリカ思想史において引き継がれてきた潮流とは言え、メインストリームと比べて多元主義としてはマイナーな、この思想史のうちの一人名としてコノリーは位置づけることができる。

多元主義のメジャーとマイナーとのどちらにも位置づけられるコノリーだが、本稿ではロールズをメインストリームの代表者として捉え、彼との比較を通じて両者の多元主義理論における差異を明らかにする。マイナーな潮流で最大の眼目とされる生成という概念がどのようにメジャーな多元主義に資することができるのか、また両者が共有する正義の地平においても相違が存在することについても検討する。コノリーとロールズとをめぐる研究は驚くほど多くない。そのせいか、コノリーの政治理論は遠回りの果てにロールズと同じような立場に回帰してしまっていると指摘されている⁷。しかし、M. ウェンマンはコノリー

⁴ コノリーの政治科学批判は彼らに向けられた批判であったものの、ダールとコノリーとの間に共通点もあったという指摘もある。それは、両者が『フェデラリスト (*The Federalist*)』における派閥の弊害の匡正というマディソン主義的なマインドを抱いているという点である。これらを巡っては Wenman (2015)、Son (2015)。

⁵ Tønder and Thomassen (2005)

⁶ Ferguson (2007)、Hogue (2018)

におけるマイナーが眼目とする生成の観念、そしてロールズが除外した存在論的な問いについて言及しており⁸、この点に目を向けなければならない。また P. シュタイナーも生成という観点に言及しつつ、両者の比較を行っている。特に彼の議論が有益であるのは、コノリーが論じる多元主義の限界を指摘している点である。こうしたコノリーの政治理論に内在する限界については M. スターマンも指摘している。彼らは、メインストリームに対抗的に取り上げられる生成という観念の有効性を認めつつも、それ自体がルサンチマンの発露や暴力の可能性となっていると述べる。彼らの指摘は非常に重要であるが、彼ら自身はこの限界あるいはルサンチマンや暴力についてどのように立ち向かうべきかは論じていない。こうした指摘はロールズの多元主義と比較した時、考慮すべき事項として重要性を増してくる。ロールズらの立場からすれば、この限界は自家中毒かニヒリズムに陥っていると見なされてしまうからである。

以上から本稿で論じる問いは次の二つになる。第一にコノリーとロールズとの比較を通じて差異を明らかにすることであり、対抗的に提起されるコノリーの多元主義理論の内にある限界について検討することである。以下では次のように論じていく。まず第二節ではコノリーとロールズとが多元主義理論をどのように展開していたかについて論じる。その後、第三節では両者の比較として、コノリーが重きを置く生成という観点から、また両者が共有する正義に関連する存在の地平における差異について論じる。最後に第四節では、コノリーが提起する生成の立場に内在する問題にどのように対応できるのか検討する。

2. ウィリアム・コノリーとジョン・ロールズの多元主義理論

本節では、ウィリアム・コノリーとジョン・ロールズそれぞれの多元主義理論について明らかにする。コノリー、ロールズという順に見ていこう。

⁷ 杉田 (2015: 340-341)

⁸ Wenman (2008)

2-1. ウィリアム・コノリーの多元主義理論

本項では、本稿が対象とするウィリアム・コノリーが論じた多元主義理論について明らかにする。コノリーは、アウグスティヌスが悪の問題を解消しようとした戦略に大きなヒントを得つつも、対抗するように展開している。コノリーは、自身を支える理論家としては多くの名前を挙げているが、対抗者として特権的に言及されている思想家は多くない。その一人がアウグスティヌスなのである。K. スカーレットが述べるように、コノリーにとって、アウグスティヌスは異端ではなく、必要不可欠なライバルである⁹。そのため、本節ではコノリーがアウグスティヌスについてどのように論じていたのか、を把握した上で、彼の多元主義理論について見ていく。

コノリーにとって、アウグスティヌスが何故重要なのか。コノリーによれば、西洋の世俗主義、自由と責任に関する観念はアウグスティヌスに大きく負っているからである。アウグスティヌスが採った戦略を丹念に調べることによって、そこに潜む政治的な要素を暴き出すとともに、アウグスティヌス主義の影をルサンチマンの発露という現代の政治問題に看取している。

コノリーが特に着目するのは、「全能かつ善である神がこの世に悪が存在することを何故お許しになられたのか」という悪の問題に対して、アウグスティヌスが採った戦略である。この問いに対して、アウグスティヌスは次のように説く。神が悪を生じさせたのではないとしたら、誰が悪を生じさせたのか？それは、人間が悪を自由意思によって選び、生じさせたからに他ならない。

悪と自由意思に関する議論において、重要となるのがアウグスティヌスとペラギウス派との論争である。ペラギウス派もアウグスティヌスと同様に悪への自由な行為を認めた。しかし、彼らは善へも人間が自由意思によって為せると主張した点で、アウグスティヌスと異なっている。アウグスティヌスは、善への自由意思を認めず、善への意志は神の恩寵を通してしか為されないと主張し

⁹ Skerrett (2004)

た。この論争の果てに、アウグスティヌスはペラギウス派に対して異端宣告を下した。

コノリーは、アウグスティヌスの主張から人々の意思のうちに存在する不調和、「引き裂かれた意思 (divided will)」が表れていると指摘する。引き裂かれた意思において、「意思は自分のものではあるが、自分が支配できるわけではない」。さらに「悪は自分自身のみで行えるが、善はそれ自身のみで行為することはでき」ず、神に依拠しなければならない。この引き裂かれた意思を癒し、統一された完全なものへとしていくためには、神の「恩寵が本質的」になっている¹⁰。アウグスティヌスにとって、引き裂かれているのが意思であることは、異端との関係から重要である。アウグスティヌスが異端宣告をした三つの派閥との対比から、コノリーはこの重要性について説明している。第一に、先に見たペラギウス派である。彼らが主張する善への意思は、「ある一人の意思の自己による支配の教説」を可能にしてしまうため、「救済における神の役割の縮減」を引き起こす危険を秘めている。第二に、ドナトゥス派である。彼らは、罪のない人間はいないからこそ、一度棄教した司祭であっても sacrament が可能だと主張した。しかし、この主張は「司祭による完成主義」を招き、ペラギウス派と同様に神の位置を損ねる危険性から異端宣告された。第三に、アウグスティヌスが改宗する前に信仰していたマニ教である。マニ教においては、善に属する精神と悪に属する肉体という宇宙における善悪という二つの争いあう力が描かれている。しかし、善悪を精神と肉体に分け、争い合う力としてしまうことは、悪に対して「責任を持つ主体であるという観念が危機に曝されてしまい」、ひいては悪の問題に舞い戻ってしまうことから受け入れられる主張ではなかった¹¹。

三つの対比からわかるように、アウグスティヌスは、教義における神の本質的な役割を基盤としつつ、神を悪から保護し、その悪と人間の責任を結びつけるために引き裂かれた意思を論じている。しかし、コノリーはここには常に何

¹⁰ AI: 54

¹¹ AI: 76-79

か不確実性が潜んでいると指摘する。例えば、引き裂かれた意思という意思内の不調和は、ともすればより明白である精神と肉体の二項対立というマニ教の教義へと滑り落ちていってしまう可能性が存在するからである。

悪の問題の解決のためにアウグスティヌスが導入した引き裂かれた意思のうちに存在する不調和を解決するために、さらに展開されるのが上記から明らかのように外的な戦略としての異端を巡る言説であり、教義の内側にいる人々に対して働く信仰告白、改宗の経験についてである。この二つの戦略は互いを補完しあい、また存在する不調和をむしろ動力として駆動していく。

まずよりわかりやすい異端を巡る言説について見ていこう。コノリーは、「アウグスティヌスのシステムにおいて、異端 (heresy) が必要不可欠である」と指摘する。なぜならば、異端を立てることによって、「眩暈が混乱や非決定性へと滑り落ちたり、さもなければ脅威となったりするような時にはいつでも、その困難を修正する」ように仕向けることが可能になるからである¹²。自分たちの教義のうちの不確実性に直面した時、信徒たちは眩暈を覚えてしまう。しかし、その眩暈が教義への疑念へと変わる前に、異端を立てることによって滑落を防ぐことができる。

コノリーは、こうしたアウグスティヌスにおける異端は誘惑であると述べている。

アウグスティヌスにおける異端は、権威ある教義それ自体のうちに浮遊する不確実性や両義性から異端宣告が原動力を得ているという点で、信仰内における誘惑である。教義が維持しようとしている最も高い希望を妨害するという点で政治的な脅威である。異端という構成が教義のうちに脅威となり続ける限り、また異端に声を与えるものを排除した自己を確立できるという点で政治的に必要不可欠である。(中略) アウグスティヌス主義における堅牢性、確実性、熱情のためには「異端が存在しなければならない」¹³。

¹² AI: 78

¹³ AI: 78-79

だからこそ、上記で見たペラギウス派、ドナトゥス派、マニ教は異端とされなければならないのである。彼らから生じる眩暈は、教義への疑念、神への疑心へと繋がりがかねない。そこで、アウグスティヌスによる「異端が存在しなければならない」という主張が逆説的に機能し、彼らの存在によって神の位置を保持する。「異教徒の信仰は、(神による) 普遍性のうちでその内在的な道徳的秩序が光り輝くために、アウグスティヌス主義を権威付け、規制するための必要条件」である。こうした中で、彼らの立ち位置は、「応答すべき対向者」として存在するのではなく、「教会によって管理されるべき劣った、放埒な信仰を持つ」対象として位置づけられる¹⁴。

アウグスティヌスの異端に対する関係は非常に両義的である。一方では、教義の内からは排除しつつも、権力が及ぶ範囲からは完全に放逐することなく、権力の及ぶ内に留めておくことによって役立てている¹⁵。コノリーが述べるように、アウグスティヌスは彼らを完全に根絶することを求めるわけではない。むしろ彼らに対して積極的に改宗することを求めている。次に、もう一つの戦略である信徒の経験、自己の内面に働きかける改宗、信仰告白について見ていこう。

コノリーは、「自己の内面を通して、より神との関係の近くへ、創造、道徳性、救済の根源へと迫る」道をたどることができるのは信仰告白によってである、と述べる。そして、この「告白は純化と道徳化という車輪として機能する」¹⁶。コノリーは、アウグスティヌスがかつてはマニ教徒であり、そこからキリスト教に改宗していった過程に着目し、告白について分析している。そこで、告白

¹⁴ AI: 76-77

¹⁵ S. ウォリンも『政治とヴィジョン (*Politics and Vision*)』の第四章においてより詳しいアウグスティヌスの権力と愛の関係を巡って考察を行っている。ウォリンによれば、アウグスティヌスは統一やキリスト教的信仰心を持つことは善であり、一方で反抗する人、異端者は愛によって救済されるべき対象として捉えられる。しかし、ここで与えられる愛とは見かけに過ぎず、恐怖によって裏打ちされた権力によって異端者を強制し、改宗を促す。異端者を迷える子羊として描くことで、自らの信仰の善性を示すという構造はコノリーの解釈と符合するだろう。

¹⁶ AI: 43

には二方向の動きがまずあると述べる。一方向は、異教の神から遠ざけ（pervert）、他方向ではキリスト教の神へと向けさせる（convert）である。改宗の経験のうちに宿る方向付けとして位置づけられるが、この方向に関連してさらに改宗の前後に特異な経験が存在する。それは、「改宗の経験に伴って、習慣、認知、判断、行為において重大な変化があるかもしれないが、しかし、今やこの変化から改宗前に対して新しい立ち位置が真理であり、優れていると不可避免的に結論付けるようになっていく」¹⁷。この点は、コノリーの対抗的な戦略において重要なため後にもう一度触れる。すなわち、一方では改宗前の神から引きはがしつつ、それを劣ったものだと思わせ、他方では改宗後の神へと近づけつつ、真理と思わせていくのである。告白は、この改宗の変化における一つの重要なモーメントであるが、そこだけにとどまらずその後も教義内の生活を覆っている。キリスト教の生活のうちでもし疑念が湧き出てきたとしても、その疑念を自分の誤りとして、例えその疑念が神そのものに向けられたものであったとしても、信仰している神に対して告白することによって、正していくのである。異端とパラレルとなるように、この告白という実践にも両義性が存在する。「神学の原理を守るために信仰を、告白し、正すべきような事柄を自己に絶えず与えるために疑念を」必要としているのである¹⁸。教義を保持するために異端が必要とされたように、ここでも疑念が求められる。

コノリーがアウグスティヌスのうちに看取した戦略は次のようにまとめることができる。悪の問題を端緒として、その解決のために引き裂かれた意思が創出された。そして、この体系を保持していくために、異端、告白、改宗について見てきた。これらは、異端、疑念、不安といった否定的な差異を創出することによって、逆説的に保持されてきた。たとえ否定的な差異が体系のうちから生じようとも、その差異を外部へと全て向けなおすことによって、純粋な体系へと回帰していくのである。

こうした悪の問題の解決の末に、コノリーは現代にも通用する政治的問題を

¹⁷ AI: 64

¹⁸ ID: 133 = 250

導き出している。それは、悪の第二問題、信仰内の悪の問題と呼ばれるものである。これは「ある個人や集団のアイデンティティを保証するために、彼らのアイデンティティの痛点を暴露するような他者を、悪や非合理的と定義するような試みから生じる悪である」¹⁹。あるいは、「自分と付き合いながら自分の信仰に反対するような人々を、力によって罰したり、矯正したり、排除したり、恐怖させたりすることなしに、どう自分の熱心な信仰を保っていけるのか」という問題である²⁰。何らかの信仰、アイデンティティなどを抱くものにとって、他者への否定的な差異の転嫁というルサンチマンへの常に訪れる内在的な誘惑である。

以上のようなアウグスティヌスの政治的な解釈、そして政治的問題に対して、コノリーは他者に悪を転嫁するようなルサンチマンへの誘惑を遠ざけ、他者が存在する余地の創出を目指す政治理論を論じる。よりラディカルになるならば、アウグスティヌスにおける唯一の神へと回帰するのではなく、世界そのものが多元化され、開かれていくことを目指す。以下では、コノリーの政治理論を詳述していこう。本節では彼自身が求める多元性がどのようなものだったのか、そのために何が必要とされるのかということを中心に明らかにする。概略的に述べれば、彼の多元性は、様々な存在者から構成される水平的な多元性と、新たな存在者を水平な軸に導き入れるための垂直的な多元化という二つのモーメントから成っている。またその二つのモーメント、交差する領域に照応するように、アゴーン的な敬意 (agonistic respect)、批判的応答性 (critical responsiveness)、自己の技芸 (art of the self) という政治的徳が提起される。順を追って見ていこう。

まず二つのモーメントについてである。コノリーは、存在の政治 (politics of being) と生成の政治 (politics of becoming) という二つの政治のイメージ、枠組みを示している。存在の政治とは政治における判断に際して基盤を提供する「正義、共通の基準、共有された理解など」を示している²¹。「もし道徳律がな

¹⁹ ID: 13

²⁰ PL: 19 = 31

いとすると、存在する人々に期待される判断の基準は失われて」しまう可能性があるため、存在の政治の重要性を認めつつも、もう一つのモーメントである生成の政治に対して重きを置いている²²。その重要視される生成の政治は、「予期せぬエネルギーや制度によって凍結された苦しみから新たに形作られるアイデンティティによるパラドキシカルな政治」として提起される²³。コノリーは、ベルクソンにおける「持続」、ドゥルーズの「感知不能なもの (infrasensible)」、ジェイムズの「多元的宇宙」といった概念に触発されて論じている。生成の政治とは、存在の政治の下部に存在する表面化していない力が蓄積されて現れていく過程、現在共有されている基準のもとで苦しみとされているものが解き放たれ、存在の政治が変容させられていく過程である。「文化的に定義されている過去の苦しみ、他者への責任に関するいくつかの基準を変更していくのである」。コノリーは、生成の政治に関する例として、自爆攻撃者が社会運動などを一足飛びに越えて国際政治の既存の外形を変えていくことや、新しい医療技術の頭頭や医者の手をかりて自殺の権利を登録簿に加えようとする動きについて言及している。こうした生成の過程における「新しい動きが、もし潰えてしまったとしても、生成が進むにつれて新たな主観内、間主観的な差異を創出していく」。この生成の動きが存在の政治に登録されて、「新たな可能性となったとき、また結晶化していない新たな苦しみのモード」を形成してしまう²⁴。コノリーはこの二つのモーメントによって、存在する人々の多元性を表す存在の政治と、そして存在の下部における苦しみが見えていく多元化の過程を表す生成の政治との緊張関係、存在の浮上と沈殿という絶え間ないサイクルを投影している。

ここで注意しなければならないのは、生成の政治が必ずしも肯定的なものごとをもたらすわけではない点である²⁵。社会に共有されている歴史的に築かれ

²¹ WS: 63

²² コノリーは、存在の政治の重要性を認めつつも、生成に対して重きを置いている。それだけではなく、生成の世界に対する信仰をも認めている (Connolly 2008)。

²³ WS: 57

²⁴ WS: 58

²⁵ PL: 121 = 202

てきた苦しみはときに何かを引き金にして暴発し、社会を危険に陥れる可能性もある。一方で、積極的に受け入れられれば、苦しみを解消するような新たな正統性、権利が得られるようになる。ここで生成の政治に対して、コノリーは次のような問い投げかける。「ある歴史的な瞬間において、どの種類の苦しみに応答する価値が最もあるのだろうか」、という問いである²⁶。存在と生成の政治の緊張関係の中で、その応答する判断を行い、均衡する役割を果たすのが政治的徳である。

図式的に当てはめるならば、存在の政治に対してアゴーン的な敬意、生成の政治に対して批判的応答性、その二つを架橋するものとして自己の技芸を割り当てることができる。まずアゴーン的な敬意とは、存在の政治における「相互依存的な政治的行為者たちの関係」として把握される²⁷。のちにロールズとの比較で検討することになるが、この実践において、人々は公的に唯一共有された倫理的源泉から論拠を引き出すのではなく、むしろ「私的領域で彼らもつそれぞれの信条や最終的な倫理的源泉から、自発的に離脱」せずに、それぞれの源泉から実践が生まれてくる。アゴーン的な敬意の関係において、実践者たちは「他者の基礎にある関連する要素を検証し、疑い、そして対比」していく。そのことによって、「ある信仰が他の信仰に勝る真理であると立証できなかったこと」や、互いに論争的な基礎を抱えているという相互認識を深めていく。アウグスティヌスにおける異端との関係を逆転し、互いに諸基礎を検討しあうことを通じて現れる不調和を他者へと転向することなく対抗者として接していくことを求める。コノリーは、二重の意味でのアゴーンがここに存在するという。一方で、自己のうちにはどうしても修正しがたい様式が存在し、そこに向けられる他者からの批判、他者への抑圧性、それでも修正できず、受け入れなければならないという苦悩（アゴニー）である。他方で、敬意のために求められる両者の存在論的な基礎に対して競争的な（アゴーン）という論争性である²⁸。

²⁶ WS: 57

²⁷ PL 123 = 204

²⁸ PL: 123-124 = 205

アゴーン的な敬意は、現在社会に存在する人々同士によって行われる共時的な実践であり、多元性の一つの側面である。それだけではなく、アゴーン的な敬意における論争性を先鋭化し、共時的な存在の政治における正義に還元されないものとして批判的応答性が提起されている。コノリーは、生成の政治に「応答するためのエートスはその全てが既に存在する道徳律の服従に決して還元されない」と述べる。批判的応答性は、生成の政治において「もし新たに現れるもののために余地を創出される必要があるときに、既に存在する道徳律のいくつかの要素を修正する」ために要請される²⁹。批判的応答性は、存在の政治において正統と認められている権利、アイデンティティ、信仰などの登録簿に新たな権利、アイデンティティなどが押し出されようとしているその過程で求められる徳である。アゴーン的な敬意によって、互いの論争可能性を認め合い、限界を明らかにし合うことによって、自己の正統性が揺らぎ新たな正統性が立ち上がろうとするかもしれない。このときに、批判的応答性が機能する。批判的応答性は、「慎重な傾聴と推定に基づく寛大さ」を内包するエートスとして理解され³⁰、自己の正統性のもとで抑圧され苦しんでいた声、不自然と捉えていた様式に耳を澄ます姿勢によって、現在の様式を批判的に捉え生成を促す。

存在の政治におけるアゴーン的な敬意と批判的応答性は緊張関係に置かれている。一方で、存在の政治におけるアゴーン的な敬意によって既存の正義を押し進めることはできるがそこにある苦しみを甘受しなければならない。他方で、生成の政治という差異の動きに応じて批判的応答性のエートスを寛容するかである。

最後に存在の政治と生成の政治が交差する領域、アゴーン的な敬意と批判的応答性を架橋するための実践である自己の技芸について見ていこう。自己の技芸は、ドゥルーズの「ミクロポリティクス (micropolitics)」、スチュアート・ハンブシャーの「技術 (technique)」、ニーチェの「自己の美学 (self-artistry)」に触発されて論じられているが、アウグスティヌスとの関連を考えると晩年の

²⁹ WS: 58

³⁰ PL: 126 = 208

フーコーの影響は特に大きい。自己の技芸は、「主観的な実践であるのではなく」、むしろ「自身のアイデンティティのうちにある要素を選択的に脱聖化 (desanctification) していく」ことである³¹。自己の技芸において目指されるは、「沈殿している層の下に真の自己を発見することでも、自身の力のみによって自己の全てを全く新しくしてしまうことでもない」³²。求められるのは、生成されてくる新たな動きに揺さぶられた自己の要素に働きかけ、批判的応答性のための修正への道、アゴーン的な敬意のための基礎を提供することである。

コノリーは自己の技芸がアウグスティヌスのうちにも見られると述べている。特にアウグスティヌスにおける技芸が表れているのは、上記で見た改宗の経験の内にある。コノリーにとって、改宗とは重大な変化の訪れであり、また不調和が訪れるときでもある。この「アウグスティヌスにおける改宗の経験に先立つ不調和とは、わがままや崩壊の源泉であるだけではなく、生の創造性、衝突する他者との寛容への道に入る」ためのモーメントである。だからこそ、改宗とは脱聖化するための契機となりうる。しかし、ここでアウグスティヌスはコノリーと道を分かち。アウグスティヌスにおける自己への働きかけは、むしろ諸要素を聖化し、改宗後の信仰を優れたものとしていく。

以上、コノリーの政治理論について見てきた。彼の政治理論は、存在と生成という二つの領域の緊張関係、両義的なものとして描かれている。存在の政治における多様な人々の実践による多元性と、その登録簿の下部での苦しみによる多元化への新しい動きという生成の政治との構成的な緊張関係である。そして、この政治に対して適切なエートスとして導入されたアゴーン的な敬意、批判的応答性、自己の技芸である。これらの特徴づけるのは論争性、不調和だ。自己のうちに論争性、不調和を見つけ、受け入れていくことによって、自己の諸要素を変革し、他者との関係を築き、新たな多元性を掬い上げていく。

³¹ WS: 146

³² WS: 150

2-2. ジョン・ロールズの多元主義理論

本項では、次にロールズの多元主義理論について見ていこう。よく知られているように、ロールズは『正義論』を刊行してから、『政治的リベラリズム』を刊行に至るまでに、自身の立場に修正を加えている。ロールズ自身も述べているように、この修正のための強い動機の一つが、「近代の民主的社会は、宗教的、哲学的、道徳的な包括的教説の多元性によってだけではなく、両立しがたいが、理に適った包括的教説によって特徴づけられている」という問題にある³³。この理に適った多元性の事実は、「『正義論』で用いられていた観念であるよく秩序付けられた公正としての正義の社会を非現実的なものに見せてしまう」³⁴。『正義論』において、ロールズは「よく秩序付けられた公正としての正義の社会の市民に対して、カントの包括的なりベラリズムの観点を含んだ同一の包括的教説を抱く」ように求めていた³⁵。しかし、多元性の事実は、市民が同一の包括的教説を抱けるという想定を非現実的なものとし、公正としての正義の存立が危ぶまれてしまった。そこで、『政治的リベラリズム』で行ったことは次である。まず理に適った多元性の事実に応答することが目標であり、そのために、近代の民主的社会のうちに存在するそれぞれの理に適った包括的教説に訴えかけ、その重なり合う要素から正義の政治的構想を立ち上げることである。以下では、前提とされる「理に適っていること」ということがどのようなものであり、また正義の政治的構想がどのように樹立されるか明らかにしていこう。

まず正義の政治的構想を導くための基礎となる「理に適っていること」について考えていこう。ここでは、多元性、包括的教説がどのようなものか、という点に絞って考えていく。ロールズは「理に適っていること」を、「平等な関係において、社会的協働に取り組む人々の徳」として、この徳にある二つの側面から導き出している³⁶。その一つの側面は、「他者がそうしようとする時、社会

³³ Rawls (2005: xvi)

³⁴ Ibid.: xvii

³⁵ Ibid.:xl

的協働に関する条件を提起し、従う意思のある」ことである。もう一つの側面は、「判断の重荷を認識し、公共的理性の使用の帰結を受け入れようとする意思があること」である。

以上のような「理に適っていること」を受けつつ多元性、包括的教説が提起される。理に適った多元性の事実とは、上記のように提起されるが、「過ぎ去っていくような単なる歴史的状況なのではなく、むしろ民主制における公共文化の永久的な特徴なのである」³⁷。そして、この理に適った多元性の事実は、単に多元的な事実であることから区別されることが求められる。たしかに単に人々は自己や階級の利害を発展しあうこともあり、そのため衝突が生じることもあるが、と留保しつつ理に適っていることは異なった状況である。そうではなく、「自由な政体の枠組みにおける理性の自由な実践の結末」として生じてくる³⁸。また正義の政治的構想を樹立するにあたって求められるのは、単に包括的教説ではない。社会的協働、判断の重荷を受け入れる意思のある人々が、自身の包括的教説のうちに理に適っている要素を見出していく。

こうした状況を所与としつつ、ロールズは正義の政治的構想の樹立を目指していく。まず政治的構想は「政治的」なものとして哲学的、宗教的などの包括的教説とは射程の側面から区別されている。政治的構想は包括的教説が問いに持つような人生の真理といった公共的理性によって、答えることができないような問いは括弧にくくり脇に置いておく。射程は、政治的、社会的、経済的諸制度という広い範囲を示す基本構造（basic structure）にある。

では、どのようにして正義の政治的構想は樹立されるのだろうか。それは主に二つ道によって相互補完的に成立しており、一つは重なり合う合意であり、もう一つは市民の道德能力（moral power）である。一つ目の重なり合う合意は、理に適った包括的教説のうちにある政治的な諸価値を浮かび上がらせ、そこから公共的に受容されうる正義の構想を樹立していくのである。後に取り上

³⁶ Ibid.: 48

³⁷ Ibid.: 36

³⁸ Ibid.: 37

げるコノリーの批判に関わって、ここで着目したいのは道德能力についてである。ロールズは、道德能力には二つの側面があると述べている。一つは正義感覚としての能力 (a capacity for a sense of justice) であり、もう一つは善の構想についての能力 (a capacity for a conception of the good) である。正義感覚としての能力は先に示したように、理に適っていることに関する能力として、市民が正義の政治的構想を理解、適用、さらに他者と協働しようとする意思をもつことを表している。善の構想についての能力は、市民がそれぞれの合理的な善を追求するために、自身の善の構想を政治的構想に照らし合わせて、形成、修正していく能力である³⁹。道德能力は、社会的協働を裏付け、重なり合う合意からより安定した政治的構想を樹立するために必要とされる。

ロールズの多元主義理論は、次のように理解できる。民主的社会のうちに本質的な状況である理に適った多元性の事実を前にして、真理を探究するのではなく、政治的な正当化を求めることによって、この事実に対応しようと試みた。こうした民主的社会には多元性の事実だけではなく、理に適った包括的教説、そして市民の道德能力が存在する。これらを梃にして、理に適った包括的教説のうちに共通する政治的諸価値を浮かび上がらせ、公正としての正義を政治的構想として立ち上げた。

3. 生成と存在の政治をめぐる

本節では第一項、第二項にかけて、コノリーがロールズに行った批判を見ていくことによって、コノリーとロールズとの多元主義理論における差異を明らかにしていく。ここまでですでにわかっているように、両者の相違は大まかに描けば、ロールズは存在の政治に取り組んでいるが、コノリーは存在、生成の政治と両面的な取り組みをしているということである。以下ではまず、一番大きな相違である生成の政治という観点が何故必要とされるのかということ明らかにする。次に、両者がコミットしている存在の政治にも相違が存在し、そ

³⁹ Ibid.: 19

れが決して小さくないことを解き明かす。

3-1. 苦しみをめぐる生成の政治

コノリーによるロールズへの批判は、主に『私はなぜ世俗主義者ではないのか (*Why I Am Not A Secularist*)』という著作で展開しており、後の著作でロールズを批判する際にはこの著作での主張が言及されている。この著作のタイトルが示す通り、ロールズへの批判は世俗主義に関連して行われている。世俗主義に関連した批判は、マーク・レッドヘッドが三点あげており、以下で見るようにコノリーの批判はレッドヘッドのものに重なる点もある。レッドヘッドがあげる三点は次である。第一に「公共的な理由に基づいて公開、あるいは公開されていない問題の境界」、第二に「市民によって共有されている根本的な政治的観念に裏打ちされた閉じた社会のうちで生きる公共的な人々に関する理論的前提」、第三に「公共的推論より先だって寛容の対象となっている様々な包括的教説」についてである⁴⁰。簡単に敷衍すれば、一点目は中絶を含め宗教的教説に基づいた反対などが考えられることや、ロールズが想定する「私たちは出生によって参入し、死によって退出する基本的構造」という観念への批判である。第二に、理に合っているということや公共的理性という観念それ自体が争われるのではないか、ということである。そして、第三に先立って存在する「理に合った」包括的教説の存在は、異なる他者に対して不寛容になるのではないか、という批判である。どれも次節で取り上げる存在の政治における比較では関連する点が多い。生成という観点から見たとき、例えば、閉じた社会という観点は生成に対して容易に障壁になると考えられる。もちろんレッドヘッドが取り上げる批判と重なる点は大きいですが、コノリーによる批判は、彼が立脚する生成の政治に基づいた批判となっている。

コノリーによるロールズへの批判の要点は、非常にシンプルである。生成の政治において求められる「批判的応答性は、正義の実践にとって本質的であり、

⁴⁰ Redhead (2015:531)

批判的応答性のない正義の実践は未加工で不完全なものになってしまう」⁴¹。「正義は、本質的に両義的な実践であり、それ自体では不十分」、という主張である⁴²。なぜ正義、言い換えれば存在の政治はそれ自体で不十分であり両義的なのだろうか。コノリー自身の存在の政治の認識に関わっている。第二節で見たように、存在の政治においては存在の登録簿に認められている人々の間での実践であり、その限りではいいかもしれない。しかし、存在の登録簿に認められなかった人々、零れ落ちた人々などその下部に存在する苦しみをつねに生じさせてもいる。だからこそ、本質的に両義的かつ不十分なのである。

コノリーは、世俗主義がこれまで宗教戦争の経験から、「苦しみの重要性、倫理的な応答の必要性を認識してきた」ことを指摘し⁴³、同時に彼自身もこの苦しみに取り組むことが倫理政治的な実践において重要な位置を占めていると考えている。コノリーによれば、「苦しみに対応するためにカテゴリーへと組織していくことは役立つが、カテゴリーそれ自体が苦しみの諸側面を隠蔽し、その隠蔽を促進することさえある」と述べる⁴⁴。苦しみは偏在的であり、カテゴリーを容易に越えてしまう。ジョージ・ケイティブは、ロールズが述べる公正としての正義においても「二原理は限定された不平等を要求」が不可避であると指摘するように⁴⁵、ロールズ自身の理論のうちにもある種の苦しみが織り込まれている。両者は、存在の政治における苦しみの存在の不可避性を共有しつつも、コノリーはロールズの正義の実践が不十分であると主張している。以下で詳しく論じていこう。

コノリーは、ロールズが掲げる社会的協働における市民の人格の概念に対して、二通りの批判をしている。それは第一に理に適っていることの基礎についてであり、より直接的な批判として第二に人格や正義の条件に対して新たに湧き出てくるような生成の動きについてである。より重要なのは第二の批判のた

⁴¹ WS: 64

⁴² WS: 69

⁴³ WS: 48

⁴⁴ WS: 47

⁴⁵ Kateb (1992:16)

め、一点目については簡単に見ていこう。

一点目として、理に適っているということの基礎はロールズが思っているほど盤石ではないという批判である。理に適っているということの基礎は、すでに民主的社会のうちに刻印されている文化に依拠している。ロールズ自身も文化性を全く無視しているわけではなく、市民の正義感覚と言った道徳能力に関わる理に適った多元性の事実はある種その問いに応答したものでさえある。コノリーは、こうしたロールズの立論を認めつつも、理に適っているという文化的背景の背後には文化における濃密さ、公共的な言説を突き崩していくような不確かさや滑りやすさが常に存在していると述べる。そのため、「文化的な論理は道徳や正義の実践のためには十分ではない」のである⁴⁶。

第二の批判に移ろう。コノリーは、ロールズが提起する暫定協定には強く共鳴しつつも、その暫定協定や世俗主義があくまでも「生成の政治における最後の歴史的瞬間」という先端で形成されたものでしかない、ということに注意を向ける。そうした先端に私たちが位置づけられているだけであり、「文化の周辺、その中で全ての事物が変化しつつあるにも関わらず、ロールズは人格に関するリベラルな観念、公共空間に関する世俗的な観念を停止させたがっている」と指摘する。ロールズは『正義論』の刊行から多元性の事実であるインディアン、女性、ゲイの権利など新しい社会運動という生成の政治の一側面に応じてきたかのように見えるが、コノリーはそうではないと述べるのである。「ロールズは、多種多様な非政治化された苦しみと同様の立ち位置に今やあると考えている。政体における文化的同一性、制度的立ち位置が生成の政治を通過してすでに修正されたものだと考えている。さらに決定的な点として、彼は彼自身のアイデンティティ（「人格」として）が新しく驚くような差異の動きに応答して、触れられもせず、変化さえもしないままでいられるかのようにいる」と批判する。ロールズが生成の政治あるいは現れてくる多元性にあたかもすっかり応答し終えて、社会に存在する不平等や苦しきは許容されたものとして倫理政

⁴⁶ WS: 65

治的に応答すべき枠組みから外に押しやっけてしまっていると、コノリーは主張する。公共空間、人格の概念を固定させてしまうこと、また第一の批判にあるように文化の濃密性を捨象してしまうことは、苦しみ为社会の中でどのような意味を持つのかを捉え損ねるだけではなく⁴⁷、それが和らげられ、存在へと浮上していく過程がそのものさえも捉えられなくなってしまう。それは、正義の下部に存在する苦しみという正義の両義的な側面を見落としていることになるだけでなく、苦しみが下部から新たに浮上しようとしつつあるまさにその局面に対して応答することができない。ロールズにおける苦しみは、ただかつてそうであったものか、今やそうではないものでしかなく、その中間の過程にある苦しみが把握できてはいない。

本項では、ロールズの多元性に関する政治理論、またコノリーが主張する生成の政治という側面がなぜ求められるのか、ということを経ロールズへの批判を通して検討してきた。コノリーは存在の政治そのものが両義的であり、正義の実践は現在存在する苦しみに対しては取り組むことができるかもしれないが、一方でその実践はまた別の苦しみを生み出してしまふ。この存在の政治では応答できない苦しみに応えるために要請されるのが現在の登録簿を批判的に捉え返し、揺れ動かす力を持つ生成の政治である。つまり、苦しみに応答することが政治理論に求められるならば、存在の政治という多元性の側面だけではなく、生成の政治という多元化への側面も必要不可欠なのである。

3-2. 超越か内在か、存在の政治について

前項では生成の政治が多元主義理論にとってなぜ必要とされるのか、という観点から苦しみに着目してロールズへの批判を検討した。そこでは、コノリーとロールズが存在の政治という共時的な次元での正義の実践についてはとりた

⁴⁷ こうした批判はI.M. ヤングによるロールズへの批判とも重なる部分がある。ヤングによれば不正義のもとでの苦しみとは、社会構造や社会的背景、コノリーで言えば文化的濃密性ととも理解されなければならない。ヤングの主張とは、不正義を和らげるためには社会構造に取り組まなければならない (Young (2011))。

てて触れてこなかった。コノリーの存在の政治における実践として相当するアゴーン的な敬意は、他者のアイデンティティや信条を自己に同化したり、無視したりするのではなく、他者性は他者性として受け入れるべきだろうと読み取れなくもない。こうした結論は、杉田敦が指摘するように一見して「やや長い回り道の果てにリベラルの寛容論に戻ってきたという印象を与えかねない」のも事実である⁴⁸。もちろんアゴーン的な敬意のみでは不十分であるのは前節で明らかにした通りではあるものの、コノリーとロールズとの間には寛容をめぐる実践、存在の政治そのものにも大きな違いがある。本節では、存在の政治における市民同士の不和に際して、両者がどのように解決を試みているのか、という点に着目し、比較を行うことで両者の差異を明らかにしていく。以下では、コノリーとロールズとにおける市民がどのように不和に対応していたのかを検討し、相違について論じていく。

まずコノリーについて見ていこう。コノリーが問題視する不和とは第二節で論じたような「悪の問題」という状況である。アウグスティヌスが伝統的な悪の問題の解決によって生じた新たな悪の問題だが、信仰といった宗教の問題に必ずしも還元されるわけではない。すなわち、他者の信仰やアイデンティティを変更させたり、抑圧したりせず、自己のを安定させ、維持させていくことができるのだろうか。コノリーはこの新たな悪の問題に対して、アゴーン的な敬意をより深化させた二層主義 (bicameralism) という実践を提起する。二層主義が意味するのは、ある同一の領域の内部において信仰、哲学、アイデンティティという多元性が共存するために「政治生活への二層的な対応」として、「二つの世界に足をつっこみ、二つかそれ以上の視点を維持して両者の緊張関係を保たなければならない」ということである⁴⁹。この二層、二つの世界、二つの視点というのは次のようなことを意味する。一層のみの実践は、悪の問題の誘惑に屈し他者の考えを排除し、自身の考えのみを貫徹させようとしてしまう。しかし、二層主義的な実践は、自己の信仰やアイデンティティなどが「他者と

⁴⁸ 杉田 (2015: 340-341)

⁴⁹ PL: 4 = 5

ともにあるものとして」捉える倫理政治的な取り組みのである⁵⁰。さらに二層主義を特徴づけられている事柄として、それらの人々の倫理的源泉となるような信仰、アイデンティティ、哲学などを私的領域においておくことなく、政治に関わるに際して公的領域に持ち込み、そこで他者のそれらを自己の構成に取り込んでいく。

こうした二層主義的实践は、コノリーによれば反対する他者という経験、生成の政治における自己が揺さぶられたという経験によって促進される。反対する他者の存在を通じて逆説的に自己の信仰が不完全であると明らかにされることによって、他者を罰したい誘惑を鎮め、同時に他者を受け入れ、そして他者の取り組みを励ますのである。この反対する他者の存在という目論見は一見錯誤的であり、注意しなければならない点がある。二層主義のためには「自分自身のアイデンティティの安定性についてのリスクをある程度受け入れることが必要」とされる点である⁵¹。他者の考えが台頭し、自己の内に侵食し続けるほどに、それは不確実性を増加させてしまう。二層主義におけるリスクの上になり立っている緊張関係については次節で詳しく扱ことになる。コノリーにおける悪の問題という不和への応答は、二層主義によって公的領域における多様な倫理的源泉の共存を求めていく。

次にロールズについて見ていこう。ここで着目したいのは、先に論じた個所と重複するところもあるが、重なり合う合意がどのようにして成立するのか、また補的に求められる市民の道徳能力についてである。道徳能力は、正義感覚としての能力と、善の構想についての能力から成り、自身の善の構想を公正としての正義に照らし合わせて修正し、社会的協働を裏打ちする。

道徳能力が養成される場面として、安定した立憲政体が樹立されるための三つの条件に関する議論を見ていこう。第一の条件とは、理にかなった多元性の事実を所与としたとき、政治の基礎となる権利や自由を一度かぎりというやり方で固定し、それらに特別な優先性を与える。第二の条件とは、安定した立憲

⁵⁰ PL: 31 = 50

⁵¹ PL: 31 = 49

政体のためには公共的理性が市民の間で共有された基礎を持ち、さらに明確な基礎を定めることが望まれる。第三の条件とは、立憲政体では政治生活における協調的な徳の涵養を促進する必要性が求められる⁵²。ここで、着目したいのは第三の条件であるが、その前になぜこのような条件を提起する必要があるのかを確認しよう。

ロールズは、重なり合う合意それ自体が十分な社会的、政治的、道徳的な力や、安定をもたらせない点においてユートピアだと述べている⁵³。そのために、より適切な政治的正義を得るために、立憲主義的合意 (a constitutional consensus) に達し、その後、重なり合う合意に達するという二段階の方法を選択し、重なり合う合意の下地として立憲主義的合意の必要性を提起する。しかし、得られる立憲主義的合意には、「階級間の利害だけでなく他者との間でのような自由原理を支持するのか」という点についての対立が生じており、また「基本構造だけでなく民主的統治に関する政治的な手続き」を含んでおらず、射程は浅く、狭い。さらに合意は人びとが初めは渋々認めた暫定協定 (modus vivendi) に過ぎず、それはより長く市民に認められ、忠誠を集められるようなものとならなければならない⁵⁴。つまり、合意が分裂する恐れのある市民間の対立、明白な基礎の不在、さらに協調が行われていない状態にあり、それをより適切な下地にするための条件が前述した三点なのである。

第三の条件に着目していこう。ここで求められるのは、市民が対立を乗り越えるだけでなく、他者と協働していこうという意思を持たせるような徳である。この徳は、道理に適っていること、公正の感覚、妥協の精神、互助の精神などを表しており、またどれも市民全員が公共的に受け入れた政治的用語で他者と協調しようとする意思と結びつけられている。こうした徳は、前述した道徳的能力によって裏打ちされることによって可能となる⁵⁵。道徳的能力によっ

⁵² Rawls (2005:161-163)

⁵³ Ibid.:158

⁵⁴ Ibid.:158-159

⁵⁵ Ibid.:163

て、市民は合意を尊重し、他者と協調して行動するようになる。もし対立が生じたとしても、すでにある合意を参照、また他者が遵守しているのを見ることで、自己の行為を反省、修正し、対立を乗り越えていく。

より重要だと考えられるのが次の点である。政治的な合意にいたるための討論の際に、市民はこのような徳を発揮すべきだが、実際にそのような討論の場は、敵対的な関係に陥りやすい。そのために、「論争の一方」は「気骨がある」ということは、堅固な確信をもち、それを他人に対し挑戦的に宣言する用意があることだ」という考えを抱くかもしれない。そうではなく、ロールズが主張する考えは、戦闘的な人びとが見逃すかもしれない「協調的な政治的徳性を公共生活において実現する社会によって達成される偉大な諸価値である」という点を示してくれる⁵⁶。

まとめよう。ロールズは、階級間の利害だけでなく、互いにどのような自由原理を支持するのかという対立から政体が分裂へと向かう事態に危機感を示し、そのために三つの条件を提示した。この際に、市民の道德能力や徳は重要な役割を果たす。社会における細かな軋轢、敵対性を乗り越えていくために、構成された合意を参照し、他者と協働していくように市民を促す。

以上では、コノリーとロールズとについてそれぞれ示してきた。最後に二人の思想を比較していこう。ロールズにおける徳は、コノリーが悪の問題と呼ぶ状況のアナロジーとも言える状況に対して提示されているように考えられる。すなわち、政治的な討論の場において、好戦的に自己の信念を貫き、相手を屈服させようとしている人びとに対して、協調的な徳、またそれを支える正義の優位性を説いて調停しようという、対立あるいは敵対性のために徳が提起されている。もちろんコノリーが想定する悪の問題は、相手を暴力などによって考えを捻じ曲げさせるようなより深刻なケースも考えられるため、ロールズが想定するケースは穏当とも言えるかもしれないが、市民たちは徳を発揮することで、共有する合意に訴えかけ、自己の価値観、信念、善の構想を修正していき

⁵⁶ Rawls (2001:114 = 2004:207-208)

対立を乗り越えようと試みている。

こうした点を鑑みれば、コノリーの二層主義はロールズに対して非常に接近していると言える⁵⁷。実際次のように述べている。

そこ（二層的な取り組み）では、「貴方」は時間帰属の経験を究極原因主義（finalism）に結びつけながら、そこでのちょっとした経緯によっては、「私」が向かった方向に向かいえたのだと気づいて、貴方自身の判断の自己一確証性（self-certainty）を慎み深く後退させるのである。そして「私」は開かれた宇宙での生成としての時間経験を抱きしめつつ、そこでの小さな転回によっては「貴方」が今信奉している方向性に私は行きえたと感じて、そうした時間経験を慎み深く後退させるのである⁵⁸。（括弧内部は著者によるもの）

捉えがたい文章ではあるものの、重要な点は次である。つまり、人びとは自己の信仰やアイデンティティを抱きつつも、他者と衝突しそうになったときや、悪の誘惑に駆られそうになったとき、反対している他者が自らの信念を曲げずに反対しているような態度に自分自身もなり得たのだという想定が、その誘惑を鎮静し、自己の確証性の反省、他者との折衝を導いていく。ここからわかるように、コノリー、ロールズはともに、対立や悪の問題に陥りそうになったとき、他者や共有されてきた合意を参照点として自己を省みて、修正あるいは後退し、他者との共存していく道を探っている。

⁵⁷ また世俗主義に関して別の点で、コノリーはロールズの世俗主義と部分的な一致を認めている。それは「一つの要求、すなわち、国家レベルの政治における権威的な中心は宗教であるべきだという要求を、それぞれの進行実践から取り除く」という点である。統治を妨げうる深刻な対立を防ぐために、最低限の譲歩として受け入れるべきだと述べている。一方で、本節で中心的な議題となるが、他にロールズが提示する世俗主義の考え方、例えば「信仰の表明や宗教的儀式の実践から信心を切り離すこと」や「私的領域における多様な信仰の上位に位置し、かつほとんど信仰と両立可能であるような公的言説によって、コンセンサスに到達すること」に対しては異を唱える（PL: 60 = 98）。

⁵⁸ PL: 168 = 282

ここまでは、両者が非常に接近した道筋を辿ってきたといえるが、ロールズが政体に深刻な対立をもたらす例として中絶の例を挙げており、この例は両者の分岐点となっている。ロールズは、中絶が「憲法の必須事項に近接し、深刻な対立の原因となりうる」として次のように解決を模索している。

われわれがもし、公共的理性の考え方を受け入れるのなら、われわれは、この問題が解決される仕方、または、解決に近いものを示唆するような政治的価値を特定するよう努めるべきである。ここで私が思いつくのは、次のような諸価値である。すなわち、公共的法が人命に対して、ふさわしい尊重を示していること。公共的法が社会の長期的自己再生産を支える諸制度を適切に規制していること。公共的法が女性の十全な平等を保障していること。そして、公共的法が、例えば神学的その他の包括的教説によって判断を下すことの禁止といった、公共的理性そのものの要求に従っていること⁵⁹。

ここで着目したいのが、『政治的リベラリズム』において最大の眼目とも言える政治的価値、公共的理性の優先性についてである。この引用からも明らかのように、例えば宗教的な理由から生命の尊さを唱え、中絶に反対する人びとは彼ら自身の信仰を論拠にして、中絶に関する法に対して反対はできないのである。もし反対するならば、宗教的な見地からではなく、市民全員に対して妥当するような観点から説明が試みられなければならない。このようにロールズは、市民同士がもし対立した際には、彼らは自身が抱く特定の教説は脇に置いて、政治的価値へのコミットによって、他者と折衝することを求める。

一方で、コノリーはこうしたロールズにおける政治的価値の優位性、市民の視点の二重性に伴う緊張感を浮き彫りにしていく。中絶の事例のように、政体に深刻な対立をもたらすような事例がどの程度生じうるのかはわからないが、多かれ少なかれ市民はつねに自己が抱く特定の教説と政治的価値を比較し、政

⁵⁹ Rawls (2001:114 = 2004:206-207)

政治的価値に優位性を置かなければならない。時には、自己の根幹に関わるようなものでも控え、政治的価値にコミットする必要がある。先に引用したレッドヘッドは次のようにこの事態をまとめている「文化的に支配されていると不当にも感じている人々は、政治的不正義についての申し立てをたしかにできる。しかし、その申し立ては、公共的理性の論理あるいは広くそうした観点に則らなければならない。言わば、「適切な政治的理由」の論理を介して醸成された議論に依拠して行わなければならない」のである。しかし、コノリーが提起する生成の政治を採用するならば、つねに新奇なものごとは生じ、人びとに対立の契機が立ち現れる。この時に、ロールズが示す徳、政治的価値の優先性を維持し得るのだろうか⁶⁰。

コノリーは、ロールズが回避しようとした公的領域への信仰と言った特定の教説の持ち込み、より強く言えば特定の形而上学が不可避的に投影されていると指摘する。コノリーは、ロールズが正義の政治的構想を打ち立てる際に用いられている「迂回して (bypass)」、「避けて (avoid)」という用語に着目し、「文化的衝突を減らすため」の用語として賞賛はするものの、同時にここには「衝突を懐柔しようとする世俗的な戦略のパラダイム」が存在することを指摘する⁶¹。コノリーは、印象的に彼らに対して主張する。「あなたたち世俗主義者たちは、残りの私たちに向かって自分自身の形而上学的観念がつまったカバンをクローゼットに置いていけと言うのに、公共的言説にあなたたちは自分たちのカバンをこんなにも多く持ち込んでいるじゃないか」と⁶²。コノリーは、公共的理性という観念がある一つの形而上学的観念によって支えられてものであり、より公的領域において論争的であることを強調する。そのために、市民のそれぞれの倫理的源泉でもある形而上学的なカバンを公的領域へと積極的に持ち込

⁶⁰ スティーヴン・ムルホールとアダム・スウィフトはもし非政治的価値を政治的価値よりも重要と見なすようなことが頻繁に起こりうるならば、ロールズが示す徳が市民の間で涵養されるのは難しくなるだろうと指摘している (Swift and Mulhall 1996 : 230 = 2007 : 284)。

⁶¹ WS: 22-23

⁶² WS: 37

むように誘う。ウェンマンはコノリーをドゥルーズやフーコーに連なる思想家、ロールズをネオカント主義者と位置付けたうえで、両者の公的領域における差異を次のように述べる。ウェンマンは、一方でロールズの正義の政治的構想を理に適っていることを介した超越論的な構想であるとし、他方で、コノリーをこうした超越論的な構想を抜きにし、それぞれの倫理的源泉に従って生成に対応する内在的平面における構想として解釈している⁶³。

存在の政治において、コノリーとロールズとは、内在主義と超越論的な構想として袂を分かち、両者はたしかに市民間の対立を危機として捉え、多元的な状況を共有しつつも、その状況に対応できる最適な方法が異なっている。ロールズが最終的に対立の調停を、正義という公的領域における単一の源泉に訴えかけ、そのもとで市民による徳や道徳能力の発揮に期待していた。それに対して、コノリーは公的領域における多様な行為や判断の源泉は、それぞれ人々のものから発し、そのうえで他者と共存を試みる二層主義的实践に訴えかけていた。

4. 多元主義のジレンマ

ここまではコノリーとロールズとの多元主義理論について、コノリーが提起した枠組みではあるものの、存在、生成の政治と二点にわたって比較を行ってきた。最後にコノリー自身のうちにある問題性について論じて終わりにしたい。ロールズの政治理論は、単一の源泉や理に適っていることのために、たとえ狭い多元主義理論になっているとしたとしても、そこにある最大の強みとは安定性である。しかし、その点についてコノリーはどうだろうか。生成の政治を政治理論として受け入れること、そのもとでの市民の実践は何らかの不確実性を抱えていかなければならない。コノリーにとって、この不確実性が政治に活力を与え、多元性のための契機となるが、視点を変えればリスクとして把握されることもある。リスクの帰結としてある脅威が生じる可能性があるとしてコノ

⁶³ Wenman (2008)

リーは、様々な著作のうちで述べている。例えば、次のようにである。「公共哲学の議論として生成の観念を織り込むことは、全能で善である神のうちによってあらわされている永遠という神聖な概念に対して挑戦し、それは人々の間に存在論的な不安を引き起こし、さらに救済への希望に対する脅威となってしまふ」⁶⁴。生成の政治は、強固な信仰を抱く人々に対して、存在論的な不安を惹起してしまう⁶⁵。それはともすれば、かえって強固な信仰へと立ち戻り、他者に不安の原因を帰してしまうようなルサンチマンの発露に向かうかもしれない。

また次のような懸念も考えられる。コノリーの多元主義理論はロールズとは異なりある種の超越論的な構想や理に適っていることというのを取り去ってしまう。それはともすれば、内在的平面でのそれぞれの人々のまさにアゴーンのみによって善悪が決定されてしまう可能性がある。それはともすれば、テロリズムでさえアゴーンの勝者となれば、多元主義にとって見逃されえない一つの立場になってしまうのだろうか。

しかし、コノリーはそうではないと強く主張する。私たちが「多元主義者」であるということは、決して「無条件の寛容」や「あらゆる基準の放棄」を試みるような文化相対主義ではないのである⁶⁶。多元主義者であるということが含意するのは「いくつかの次元において文化的多様性を称揚するものであり、必要な時には、一元論に対抗して多元主義を支持するための戦闘行動に加わる用意がある」ということである⁶⁷。しかし、スクールマンが指摘するように、まさに多元主義者であることによって、「コノリーのアゴーン的な敬意という原理は直接的に悪の第二問題である他者に差異を転嫁する」ような事態に直面してしまうのである⁶⁸。だからこそ、コノリーが提起する生成の政治によって引き起こされる不安に伴うルサンチマンという暴力、相対主義への滑落の可能性を防ぎうる術が見出されなければならない。不確実性の上にもどのような balan

⁶⁴ WB: 106

⁶⁵ ここでは、強固な一神教について取り上げたが、生成の世界における無神論者の脆弱性 (predicament) としてニーチェへの言及がなされている (WB: 109-116)。

⁶⁶ PL: 41 = 69

⁶⁷ PL: 41 = 70

スで多元主義を成り立たせるべきなのだろうか。以下では、まず不安がどのように定位できるのか見ていこう。次にそこから立ち現れるルサンチマンに対応できるのか論じていく。

先に引用したように、生成の政治は人々に対して新たなものごとをもたらし、彼らの確信を揺らがしていく。それだけではなく、生成の政治そのものが必ずしも肯定的なことをもたらすわけではないとコノリーは述べる。そこでは、「歴史上の個別的な苦しみ、かつては利用されていなかったエネルギー、支配的な構成員たちの注意をすり抜けた可能性」から生じてくるその仕方それ自体がルサンチマンをエネルギーとして暴力的な運動となることもあるし、それが結果として他者への脅威となることもある。

こうした暴力が現れたときどうなるのだろうか。この時、多元主義にとっての限界、ジレンマが浮き彫りになる。

多元化を行う文化のうちには様々なリスクや危険が存在する。しかし、最も繊細な政治的応答を要することの一つは、自身とは異なる人々を悪魔化したり貧困者にしたりすることによって自己がなんであるかを確立しようとする傾向に対してである。アイデンティティ間の競合が文化的な戦争へと退行した時、批判的応答性のエートスは惨憺たるものになってしまうだろう。結果として、原理主義者があなたに述べたように、あなたも原理主義を抑制しようという命令に応えるならば、自分自身に対して向けられた悪が再構成されるようリスクを負うことになるだろう⁶⁹。

⁶⁸ Schoolman (2008:53)。スクールマンの指摘は正しくは次である。彼によればコノリーは民主主義に規範的にコミットしており、また自由民主主義であるために責任の原理は必要不可欠であると認めている。本稿の第二節で見たように、責任の原理はアウグスティヌスに負っている側面があり、悪を引き起こした原因の追究という面も持ち合わせている。コノリーの多元主義は明確に民主主義社会にコミットしており、責任の原理に対して両義的でありつつも引き受け続けている。しかし、まさにそのために悪の第二問題を引き寄せてしまうのである。

⁶⁹ EP: 194

自己の信仰やアイデンティティの確立のために、市民同士が他者に差異を転嫁しようとし合うならば、コノリーが目指す政治はただの文化的な戦争へと
なってしまう。ここには、多元主義にとっての脆さ、ジレンマが存在するとい
う。「文化の多元化に何らかの制限をしないとすれば、多元主義それ自体が掘り
崩されてしまうだろう。強烈な敵対者があなたにしたように、同様に応えるな
らば、多元主義はそれ自体がしようとしている試みによって打倒されてしま
うだろう」⁷⁰。生成の政治によって多元化を求めることは、一方でそこから引き
起こされる不確実性などによって内側から掘り崩されてしまうかもしれない。
このパラドクスが、コノリーの戦略において一つの限界を表しているように考
えられる。コノリーが目指す多元主義が繁栄するために、生成、そしてそこに
付随する不確実性は必要不可欠である。これらを捨て去ることなく多元主義を
維持していくためには、不確実性そのものを取り去るのではなく、多元主義を
掘り崩していくようなルサンチマンなどの動きに抗していかなければならぬ。
コノリーは、そのために制限を課すべきだと述べるがどのようにすべきなのだ
ろうか。

コノリーが提起する批判的応答性はその事態に対応するための一つの解答か
もしれない。批判的応答性は、現在の様式を批判的に捉え多元化を促進する側
面を持ち合わせているが、それだけではなく、「新しい集団や運動が要求する全
ての出来事に、常には応じないという」批判性も持ち合わせている⁷¹。存在と
生成に対する二面的な批判性は有効かもしれない。しかし、ここまで示したよ
うに、多元化のために新たなものを全て受け入れることは多元主義を危機に晒
し、一方で批判的な態度は彼らの敵対性を強化し、もしかしたら多元主義を打
ち負かしてしまうかもしれない。

ここで二つの道をたどることにはしてみたい。一つは、制限の仕方についてで
あり、もう一つは、これまで主張してきたように変わらずに生成の政治を保持
することである。その道はもしかしたら遠回りの果てにまた限界点に帰り着い

⁷⁰ EP: 235

⁷¹ PL: 127 = 210

てくるかもしれないが、多元主義に伴うもろさ、そしてリスクこそが深い多元主義たるために必要とされる要素であると明らかになるだろう。

まず制限の仕方について検討していこう。何に対して、そしてどのように制限をかけるべきなのだろうか。第一に、何に対して制限をかけるべきか、つまり何に対して批判的応答性は応じないという批判性を表すべきなのだろうか。それは、コノリーの政治理論と真っ向から対立している一元主義である。コノリーが目指す多元主義は「排他的な一元論的な運動が政治形態全体を占有させないために——すなわち、領域的な政治体制をあまりに同心円的で閉鎖的なものにさせないために、寛容に対して制限を設定する」⁷²。ここでの一元主義とは、信仰、アイデンティティ、思想、道徳的源泉などが同一であることを要求し、差異を他者性へと転換し排除していく立場である。こうした一元主義のなかに、ここで問題としているルサンチマンは含まれるのだろうか。答えはイエスだろう。ルサンチマンは、他者に否定的な差異を押し付け、排除していく試みであり、多元主義を阻害するものとして捉えられ、応じないという意味での批判的となる。だが、こうした制限は、彼らを永続的に寛容の外に追いやり、彼らの一元的な思想を強化するだけになってしまうだろう。そのため、ここでより重要なのはどのように制限を定めるかだろう。

ここで定義される制限は、「多様性の範囲に最終的な制限を前もって設定することには慎重」さを持っている⁷³。最終的な制限それ自体が、苦しみを生み続け、多元性への障碍となるのは明白であり、さらに応じないという意味での批判性それ自体がルサンチマンや苦しみを生じさせる原因ともなっている。ここに批判的応答性の真価が発揮されるだろう。すなわち、制限を課すという応答しないという意味での批判性と同時に、制限を行う自身が属する地平へも批判的になるという両面的な批判性である。だからこそ、定義される制限はもちろん一元主義に対してなされるものではあるが、それは単純な否定として行われてはならない。単純な否定は一元主義の裏返しに過ぎず、制限は慎重さを伴

⁷² PL: 42 = 71-72

⁷³ PL: 42 = 72

いつつ自己に反省的でなければならない。一方では一元主義に対して批判的になりつつも、他方では制限という判断の際に依拠している基準にも批判的になり、制限の不確かさを認め、互いに折衝していくことを試みる。

ここにもう一つの道が開けるだろう。再び生成の政治を追求することで、人々のうちに不確実性や偶然性を喚起し、互いの論争可能性を認めていく経験を重ねる試みである。こうした点について、ジェイムズ・ウィリアムズの論考は示唆を与えてくれる。ウィリアムズは、コノリーの議論に端を発し、ホワイトヘッドの悪の定義、ドゥルーズのパラドクスに取り組み、論争可能性であることをより明確なものとしている。ホワイトヘッドが仮定したように、もし完全な悪と、完全な善が存在するとしても表象するための空間、時間は有限であり、完全な決着は不可能であるという⁷⁴。またドゥルーズが示す後退のパラドクスや不確実性の増加から、私たちが用いる言語の不確かさを主張している⁷⁵。決着の不可能性、言語の不確実性は消極的に捉えられるのではなく、多元主義へ「肯定的な創造的役割を与え、さらに多元主義を正統化するだけでなく、その発展にも寄与」してくれる⁷⁶。だからこそ、こうした不確実性は、一元主義やルサンチマンへの制限に際して衝突する両者にその主張の再考を求め、論争可能性を認めていく余地を開いていく可能性を持っている。

逆説的に、ここで問題とされてきたリスクは不確実性を喚起し、多元主義をより深めてくれる生成の政治として現れる。現れるルサンチマンは、反対する

⁷⁴ 悪の定義として二点挙げており、一点目としてその悪の目的とは私たちと私たちの生活様式の破壊であり、二点目として可能性があるならば悪はその目的をし続ける力を持っているとしている。この定義をもとに、悪と善の衝突は次の三点のようになるという。第一に、その観念は完全というよりは有限な世界に現れる。第二に、どんな事実に基づく状況であっても必然的に排除を含む。第三に、創造的な思考は排除された観念を可能性として再導入できる (Williams 2008: 147-148)。

⁷⁵ ウィリアムズはドゥルーズのパラドクスを合理的な討論と対比させている。すなわち、合理的な討論では、討論にあたって確固たる基礎を必要とするが、ドゥルーズのパラドクスはその不可能性を示している。用いる言葉の意味を確定しようとするれば、その意味自体を説明しようとする意味を持ち出さなければならず、こうした言語の性質を抹消しようとする試みはかえって困難を増させると指摘する (Williams 2008: 150-153)。

⁷⁶ Williams (2008: 151)

他者として設けた制限が完全ではないということを示す契機となる。それはもしかしたら自身が設けている制限や判断、信仰やアイデンティティが抑圧の原因となっているのかもしれないと反省を促し、多元化への契機となりえるだろう。また自身がルサンチマンを抱き他者に向けてしまったとしても、その時に他者が自身の論争可能性を認めてくれる姿勢は、ルサンチマンを緩和させるかもしれない。一度だけではそうした余地は開かれられないかもしれないが、幾度となく繰り返され、互いの経験の積み重ねはルサンチマンを緩和していく可能性を持っている。

もちろん何らかの苦しみやルサンチマンは決して消えることなく、幾度となく現れるだろうが、それは多元化への可能性を秘めており、また多元化のために求められた不確実性はここまで問題としてきたリスクを含んでいるものの、そのリスクはもはや消極的には捉えられない。生成を追求し差異の動きへと鋭敏になることは分断へと繋がるのではないと明らかになっただろう。コノリーが述べるように「多元化を求めることは、断片化させることではなく、ドグマ化させることこそが断片化を引き起こす」のである⁷⁷。多元主義とは無制限の寛容やあらゆる基準の放棄を意味するわけではない。多元主義にとって障害となる暴力、ルサンチマン、ドグマ的な運動に対して抵抗する。しかし、それはただ彼らに対して「ノー」を突き付けるのではなく、自分自身に対して働きかけ修正されながら行われなければならない。

5. おわりに

本稿での問いは、多元主義理論についてコノリーとロールズとの比較を通して両者の差異を明らかにすることであり、また生成という概念を織り込んだコノリーの多元主義理論にジレンマに取り組むことだった。両者の差異とは生成の観念があるかどうかによって、存在の政治の下部における苦しみに取り組むことができるかどうかだけではない。正義に関わる存在の政治において、どの

⁷⁷ EP:197

ように市民の倫理的源泉を把握するかという点についても異なっていた。しかし、コノリーの生成への信仰は、ロールズのような立場から考えればあらゆる基準の放棄や無制限の寛容のように捉えられかねない。それだけではなく、生成の政治の内部においてさえリスクを常に抱えているのは首肯できないだろう。こうした疑問に対して、生成の政治で現れてくるルサンチマンに対してどのように対応すべきか論じるかによって一つの解答を示した。

コノリーとロールズとの多元主義理論の差異は明確に存在するものの、次のような批判が容易に考えられる。コノリーが望む多元性とは結局多元主義が許容する限りにおいてであり、そうだとするならばロールズが論じた理に当てていることの内の多元性を民主主義や多元主義が維持されるという程度に薄く広く引き伸ばしたのに過ぎないのではないか。単純に多元主義という「単一」の理念のうち少し広いだけの多元性を取り入れたのに過ぎないのではないかと。コノリーはこうした問いに間違いなく「イエス」と答えるだろう。我々はあくまでも多元主義者であり、全てを寛容するわけでもなく、民主主義の持続を望んでいると。しかし、次のようにも答えるだろう。多元主義理論が生成の観念を取り入れることは、凝り固まったような多元主義に固執するのではなく、時にはその枠組み自体が揺るがされ刷新していくこと求めるのである。

参考文献および略号一覧

- EP Connolly, William E. (1995) *The Ethos of Pluralization*, Minneapolis: University of Minnesota Press.
- WS ——— (1999) *Why I Am Not a Secularist*, Minneapolis: University of Minnesota Press.
- ID ——— (2002a) *Identity Difference: Democratic Negotiations of Political Paradox Expanded Edition*, Minneapolis: University of Minnesota Press.
- AI ——— (2002c) *Augustinian Imperative: A Reflection on the Politics of Morality New Edition*, New York: Rowman & Littlefield Publishers.
- PL ——— (2005) *Pluralism*, Durham: Duke University Press. (杉田敦、鶴飼健史、乙部延剛、五野井郁夫 (訳) (2008) 『ブルーラリズム』岩波書店)

- WB ——— (2011) *A World of Becoming*, Durham: Duke University Press.
- Connolly, William E. (2008) "Belief, spirituality and time," *The Immanent Frame*," <http://blogs.ssrc.org/tif/2008/04/17/belief-spirituality-and-time/> (2018年12月7日)
- Ferguson, Kennan (2007) *William James: Politics in the Pluriverse*, Maryland: Rowman & Littlefield Publishers.
- Hogue, Michael K. (2018) *American Immanence: Democracy for an Uncertain World*, New York: Columbia University Press.
- Kateb, George (1992) *The Inner Ocean: Individualism and Democratic Culture*, Ithaca: Cornell University Press.
- Rawls, John (2001) *Justice as Fairness: A Restatement*, Cambridge: Harvard University Press. (田中成明、亀本洋、平井亮輔 (訳) (2004) 『公正としての正義再説』岩波書店)
- Rawls, John (2005) *Political Liberalism Expanded Edition*, New York: Columbia University Press.
- Skerrett, K. Roberts (2004) "the Indispensable Rival: William Connolly's Engagement with Augustine of Hippo," *Journal of the American Academy of Religion*, 72(2): 487-506.
- Steiner, Philip A. (2004) *Politically Unbecome: Rawls, Connolly and Fondness for the Dead*, Department of Law Carleton University Master of Arts.
- Redhead, Mark (2015) "Complimenting Rivals: Foucault, Rawls and the Problem of Public Reasoning," *Philosophy and Social Criticism*, 42(6), 526-548.
- Schoolman, Morton (2008) "A Pluralist Mind: Agonistic Respect and the Problem of Violence toward Difference," in Campbell, David and Schoolman, Morton (eds.), *The New Pluralism: William Connolly and the Contemporary Global Condition*, Durham: Duke University Press.
- Son, Kyong-Min, (2015) "A Discordant Universe of Pluralisms: Response to Wenman," *Political Theory*, Vol43(4), 533-540.
- Swift, Adam and Mulhall, Stephen (1996) *Liberals and Communitarians: Second Edition*, New Jersey: Blackwell Publishing. (谷澤正嗣、飯島昇蔵 (訳) (2007) 『リベラル・コミュニタリアン論争』勁草書房)
- Tønnder, Lars and Thomassen, Lasse (2005) "Introduction: Rethinking Radical

- Democracy between Abundance and Lack,” in Tønder, Lars and Thomassen, Lasse (eds.), *Radical Democracy: Politics between Abundance and Lack*, Manchester: Manchester University Press.
- Wenman, Mark (2008) “William E. Connolly: Pluralism without Transcendence,” *BJPIR*, 10: 156-170.
- Wenman, Mark (2015) *William E. Connolly: Resuming the Pluralist Tradition in American Political Science*, *Political Theory*, Vol.43 (1), 54-79.
- Williams, James (2008) “How to be Bicameral: Reading William Connolly’s Pluralism with Whitehead and Deleuze,” *BJPIR*, 10: 140-155.
- Wolin, Sheldon (2006) *Politics and Vision: Continuity and Innovation in Western Political Thought*, New Jersey: Princeton University. (福田歓一他(訳)(2012)『政治とヴィジョン』福村出版)
- Young, Iris M. (2011) *Responsibility for Justice*, Oxford: Oxford University Press.
- 乙部延剛(2003)「ウィリアム・コノリーの思想形成一言説・政治・責任」政治思想学会(編)『政治思想研究』風行社, 133-150
- 杉田敦(2015)『権力論』岩波現代文庫
- 早川誠(2001)『政治の隘路 多元主義の20世紀』創文社刊
- 森政稔(2014)『〈政治的なもの〉の遍歴と帰結 新自由主義以降の「政治理論」のために』青土社

(さとう りょうと)
(2018年2月7日受理)

Summary of an Article in English

Two pluralism and its dilemma on William Connolly and John Rawls

SATOH, Ryoto

PhD. Student, Tokyo University

This article pursues two questions. First, I clarify difference between William Connolly and John Rawls on their political theory of pluralism. Second, I respond to problem which is intrinsic to Connolly's theory. In conventional pluralism, they argued about pluralism of rights and worth in public sphere. This paper takes account Rawls into this conventional pluralism. But there is other pluralism. It pursues ontological questions how rights, worth, and beings, humans and non-humans, are engendered. Connolly is placed not only conventional pluralism, but also this pluralism accounting becoming. There are two differences between them. It is obvious that Rawls doesn't introduce "becoming" into his theory. Connolly says that it means he cannot grasp ambivalence of justice. There is also difference on politics of justice they share. While Rawls intends justice as a kind of transcendence in public, Connolly asserts immanent idea that citizens interact with each ethical sensibility, not transcendence.

Politics of Becoming, Connolly argues, however, has also a problem. Pursuing politics of becoming, there is some possibility of provoking violence, resentment. If we didn't limit these risks, pluralism would be not only undermined, but also defeated by opponents. But, limiting itself is barrier to pluralization. This is a dilemma in his theory. To respond to this dilemma, I discussed how to limit emerging resentment. You not simply limit resentment,

but also should be critical to your judgement. Then, risks as emerging resentment make us reconsideration of limits and engender moment of pluralization.

The paper concludes with alternative account of pluralism, one that emphasizes its immanence and its fragility understood as necessary and impossible.